国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM

◎カラー　International Post-Program Activities
ネットワーク作りに向けて

●特 集　活動するメンバーからの声

マクロコズム '96.5

vol. 10

㈶青少年国際交流推進センター

ネットワーク作りに向けて ―― 組織化の重要性を認識しよう! ――

今年度で第23回を迎える「東南アジア青年の船」、第9回を数える「世界青年の船」及び航空機により相互交流を行っている国際交流事業に参加した外国青年との連携活動は、これらの事業の真価を問われるもっとも大切な側面です。長年の努力が実って成果が見えてきており「多額な予算を掛けて青年国際交流事業を行う意味は、まさにここに有り。」と自信を持って言うことができるようになりました。

言い替えれば、事業終了後のフォロー無くして国際交流事業を行うことは、無意味であるとも言えます。

今や、国際交流事業は、民間ベースはもちろんのこと地方自治体でも数えきれないほどに行われており、特に青少年育成分野では欠かすことの出来ない要素となっています。しかし、事業参加後のネットワーク作りという点になると、どこも苦しんでいるというのが実情ではないでしょうか。

事業後のネットワーク作りを継続するためには、それだけ確固たる目的意識と信念そして継続しようとする意欲が必要なのです。事業を体験している時に感じた感動も、日常生活に戻ると少しずつ薄れて思い出になってしまいます。感動を行動に移すためには、仲間との連携が大切なのです。

個人の具体的活動の展開も大切ですが、同時にどのような理念や理想を目指すのかを語り合い、組織としての枠組みを作り上げて行く努力も必要です。あなたと同じように活発な活動を目指して頑張ろうとしている仲間が海外にも沢山いることを、活動へのエネルギーにしてください!

IYEO本部が、この半年間に行った海外とのネットワーク作りのための活動を紹介します。

▲ 上村青少年対策本部次長に表敬訪問を兼ねて活動報告を行う

◀ 船上において同窓会の活動説明をフィリピンのメンバーにしているオラフ氏（第19回既参加青年）

〔「東南アジア青年の船」に関連して〕

On Board Ship Conference（OBSC…船上者会議）

総務庁青少年対策本部主催により「東南アジア青年の船」で行われているもので、最終寄港地から日本までの期間（第22回（1995年）は、11月8日～13日）に「東南アジア青年の船」参加各国既参加青年活動組織と日本青年国際交流機構の代表者が乗船し、参加青年に、連携活動と各国組織の活動について説明をします。日本滞在中（11月13日～17日）は、各国における活動の情報交換や共通活動について協議します。

Council of President（COP……会長会議）

日本青年国際交流機構とアセアン各国の東南アジア青年の船既参加青年活動組織で構成しているSSEAYP Internationalの各国会長会議。各国持ち回りで開催している総会の際と他に2回、年に3回開催しています。今回は、5月に行われるSSEAYP International第9回総会と憲章の改定を中心議題としました。なお、宮城県への地方旅行の際には、仙台市郊外にある「四郎丸小学校」を訪問し、フィリピンの子供の絵を渡したり、一緒に歌ったりして子供たちとの交流も深めました。

▲ タイの踊り（ロイ・クラトン）を教えるタイ代表のスパパンさん

◀ COPの様子
青少年対策本部職員とともに
活発な議論が展開された

〔「世界青年の船」に関連して〕

「世界青年の船」既参加青年連絡会議

平成8年1月16日から21日の日程で、13か国14名の代表者が招へいされ、「世界青年の船」（東廻りコース）の国際的ネットワーク作りに向けての協議がなされました。名簿の作成、定期的情報交換、ニューズ・レターの作成など基本的事項を決定して組織作りの第一歩を踏み出しました。（詳細は、マクロコズム第9号参照）

㈶青少年国際交流推進センター会議室で、会議を終了して和やかな雰囲気で懇談する各国代表者達 ▶

「世界青年の船」インターナショナル・リユニオン

3月1日・2日、ドバイ（アラブ首長国連邦）において第1回「世界青年の船」インターナショナル・リユニオン（西廻りコース）が開催され、8か国60名が参加しました。昨年の、アカプルコ（メキシコ）における東回りコースのリユニオンに続いて開催されたわけで、これで東西の足並みが揃ったことになります。（P.6参照）

◀ ドバイ寄港中のなつかしの「にっぽん丸」船上で今後の活動について語り合う既参加青年たち

会議を円滑に進めるべく最初のリードを取る森田正英IYEO副会長（第6回NL）▶

◀ 限られた時間の中で何か結果をださなくては！

インターナショナル・ネットワークの確立にむけて

組織活動の重要性を認識しよう！

日本青年国際交流機構
会長　大森　　充

新年度に当たりまして、日本青年国際交流機構及び国際交流の振興にご尽力されている皆様に、一言ご挨拶させていただきます。

去る3月の日本青年国際交流機構第23回全国推進会議において役員の改選を行い、この4月から、今後2年間を任期として新体制がスタートしました。㈶青少年国際交流推進センターの設立から2年を経過し、この間を振り返りますと、多くの方々のご尽力、ご協力をいただき一歩づつ歩みを進めることができたことに深く感謝する次第です。

㈶青少年国際交流推進センターという大きな基盤を得たことによって、私たち日本青年国際交流機構の持つネットワークを着実に育てることができるようになったことは、何よりも喜ばしいかぎりです。特に、総務庁青少年国際交流事業によって生まれた海外青年との交流をネットワークとして育て確立していくことは、私たちの大きな願いの一つでしたが、この2年間の間に「世界青年の船」のネットワーク作りが始まり、アセアンの「東南アジア青年の船」既参加青年組織との連携活動に続く大きな展開が見られたことは、何よりの成果でした。現代の傾向として大きな組織を敬遠する向きもありますが、社会に貢献しうる活動を展開するためには、多くの人材の力と理解そして人々を結び付けて行く努力が必要です。これは個人の力や小さな集団で成しうることではありません。人々の出会いをより良き形あるものに築き上げていくためにも、人の活きるネットワークを目指して、組織活動の重要性を認識しようではありませんか。私たち役員も、2年間の任期を精一杯務めさせていただきますので、ともに心をあわせて頑張りましょう。

主な内容

IYEO 大森会長あいさつ ……5
「世界青年の船」リユニオン ……6〜7
ママさん子連れ留学奮戦記 ……8〜10
パレスチナ選挙監視員報告 ……11
とっとり青友会レポート ……12
SSEAYP FOREVER ……13〜15
友達を「財産」にしちゃおう！ ……16
「しあわせって　なに」 ……17
全国推進会議報告 ……18
国際交流振興係紹介 ……19

〈表紙の説明〉
フィリピン
ストリートチルドレンの作品
作者名不明 「夢」
アジアのこども絵画展より
優秀賞受賞作品

熱い思いとともに

森田　正英

（日本青年国際交流機構　副会長
第6回「世界青年の船」ナショナルリーダー）

昨年の東廻りのメキシコ（アカプルコ）におけるリユニオンに続いて、西廻りのリユニオンをアラブ首長国連邦のドバイで開催することが決定し、日本からは、事務局担当として日本青年国際交流機構副会長の森田正英氏、第2回既参加青年の落合雄彦氏、第6回既参加青年の原田薫さんに参加してもらいました。

参加者は8各国60名に達し、日本からも上記の3名に加えて7名が合流して10名が参加しました。

飛行機で行ったドバイは遠かった。

成田から香港――バンコク――ボンベイ――ドバイの飛行距離は9,581km、飛行時間だけで12時間32分。早朝に日本を発ち、ドバイ時間で深夜12時に到着。ホテルにチェックインし、床に就いたのは午前2時。5時間の時差を考えると日本時間午前7時。移動にまる一日を費やしたことになる。

乗船後、同窓会の下準備について管理部やナショナルリーダーと打合せが始まったのも、翌日の午前12時半から。われわれ同窓会の移動事務局班の面々は、体力勝負である。

長旅の疲労を吹きとばしてくれたのは、笑顔で空港まで出迎えに来てくれたフィンランドの同期の仲間達との抱擁と、2回や4回のUAE、オマーンの既参加青年との談笑。それに、にっぽん丸がポート・ラシッドに入港したときに集まってきた懐かしい顔ぶれである。近況報告と昔話にと、にわかに歓迎式典を準備する波止場ににぎやかさが生まれた。2回の参加青年でUAEの方と結婚されたナオコさんも、4歳の男の子と3歳の女の子を連れて着物姿で登場。7か月の男の子は乳母車でお昼寝。このような光景が同窓会であろう。

本会議が終わったあとは既参加青年同士で車を走らせ、ドバイ近郊の砂漠で、蠍（さそり）が這い出てこないかといささか怯えながらも、バーベキューパーティーを開き、月明かりだけの中で、オマーンダンスやアラブの音楽演奏に興じた。またナオコさん宅でホーム・パーティーを開いてもらい、アラブの生活を聞かせていただいた。

ドバイが急に近くなった。

船上の本会議

移動事務局班は、キャンセル者がでたため、名簿の再整理、キャビン再振分け、その鍵の確認、さらには同窓会プログラムの資料整理、プログラムの進行や議題のツメ、会場となるドルフィンホールの下見、船側との調整、そして管理部への挨拶や8回の参加青年の同窓会に対する取り組みについての聞き取り、と船内での準備でフル回転である。

2日間にわたる船上での本会議では、所期の目的はほぼ達成された。1月16日～18日の東廻りの「世界青年の船」既参加青年連絡会議（東京）

で決議されたデータベースの整備をキー・パーソンがとりまとめることを伝達し、参加各国でそのキー・パーソンを選出した。限られた参加国であったが、今後のIYEOの方針を伝えることができた。この点でも、6回の既参加青年で申し込んだスリランカ、ネパールにビザが発給されず、参加できなかったのが残念。

本会議ではさまざまアイディアが提案された。同窓会日程について3か月前までの連絡、正式な招待状の発送、参加できない国のための支援策、ヨーロッパ、アフリカ、中近東、南アジアでの定期的な地域同窓会の提案、船内での同窓会に加えて「にっぽん丸」の寄港前後の数日を会議や社会的なテーマを扱うディスカッションにあてるなどの建設的な意見が続出した。いずれも一朝一夕にいかないだけに、結論には至らず、総務庁やIYEOからの今後のイニシアチブが大きな課題として残った。

事後活動の基本は名簿の更新である。毎年、船が寄港する「東南アジア青年の船」は同窓会活動が寄港地活動と連携されている強みがあるが、歴史を重ねて大所帯になり運営面で苦労する部分もでている。「世界青年の船」の既参加青年は、広範な地域で2年に1回という同窓会に大きな期待と憧れを寄せ、物理的な距離がその期待感と憧憬をいや増す。根底には、一生に一度の経験をいとおしむ気持ちがあり、自分のキャビンを見に行ったり、にっぽん丸グッズを求める行動に追体験願望が端的に表わされている。それだけに、まだまだ「世界青年の船」の既参加青年の思いは熱い。

▼ 日本人参加者10名とUAEのメンバー

未来に向けて

同窓会活動を未来思考型の側面を持たせるためには次のようなことが考えられる。

1）二国間の情報交換・交流の促進（たとえば、オマーンの既参加青年は日本・オマーン友好協会の活用をしきりに説いた。派遣の既参加青年との連携活動なども考えられる）

2）多国間・参加回数間の情報交換・交流の促進（たとえば、既参加青年と参加青年との交流の時間を設けるため、寄港地間の既参加青年の乗船、船内での開発教育などのプログラムの実施など）

3）他地域間との情報交換・交流の促進（たとえば、「東南アジア青年の船」同窓会連携組織への招待や、アジアのこども絵画の巡回貸し出し展示など）

いずれにしろ、今回のリユニオンが西廻りの「世界青年の船」既参加青年の活動の端緒となり、大きな広がりにつながることを期待したい。

最後に、末筆ながら、こころよく協力して下さった「第8回世界青年の船」管理部や「にっぽん丸」クルーの方々や現地でドライバー役をかってでてくれたUAEやオマーンの既参加青年に厚くお礼を申し上げます。

これは、中国語の勉強を目指して一念発起し、やさしいご主人の理解を得て1年間の語学留学を果たした東海寿子さんが作成した文集からの抜粋です。二人のお嬢さんを連れて、昭和63年中国の太原で過ごし、多くの感動を得た1年間の記録です。

ママさん子連れ留学奮戦記
―― 冬休み（食糧・交通事情）――

東海　寿子
（「第9回青年の船」参加青年）

試験の後は、春節（旧正月）を中心とした4週間の休みがある。日本の留学生たちは次々と旅行へ出た。「日本の若者は金持ちだ。休暇旅行に何十万と使うんだから」と中国人はうらやましがり呆れた。私は子連れだから身軽ではない、しかも、夫からはチョロチョロするなと釘をさされていたから、太原で静かに過ごすつもりでいた。しかし、この静かな計画も崩れることとなった。

「餃子湯」

太原は、大都市の北京や沿岸の大連、上海などと違い、食糧事情は日本と比較にならない。日本にいれば、中国の人達は毎日、餃子や焼売をたべていると思うが、現状はそうではない。ときどき私は、親しい友人宅へ寄るが、いつも小麦粉を練ってこしらえたうどんの上に、細切りじゃが芋の炒め煮をかけて食べていた。彼女は、とうに結婚して子供もいるが、一人娘の楊青は夕飯も保育園で食べていたし、向かいのアパートに住む自分の両親によく預けていたから、自分一人が食べさえすればそれで済んだ。仕事を終えて帰宅した彼女の御主人は自分で作って食べる。彼女は、たまの休みに家族の洗濯をするくらいだ。

学生寮やアパートがひしめきあう大学の講内に小さな食堂があり、ここの味の評判がよく私も時々利用した。この食堂で餃子を頼むと、「餃子湯」を飲ませてくれる。餃子をゆでたあとのただの残り汁だが、醤油も塩も入っていないのに、何故かおいしいスープだった。また、ここでは箸を持参しないと衛生子（箸）一膳につき三毛をとられた。包子（小ぶりの肉まん）も有名な天津包子に負けぬおいしさで、私はアルミの弁当箱をさげて買いに走った。

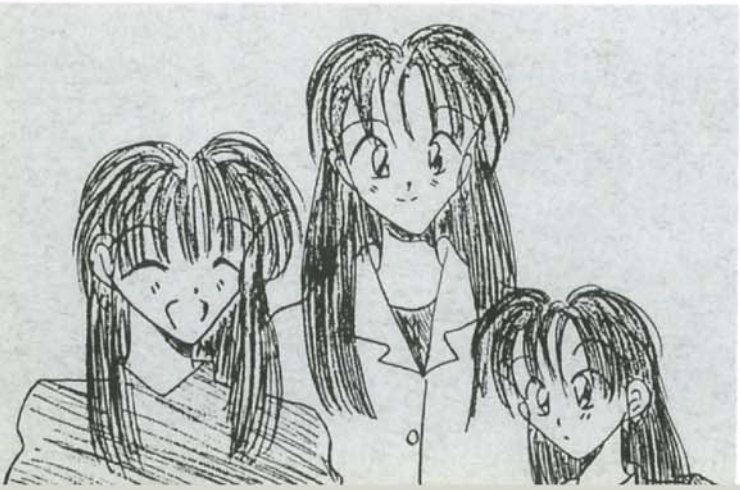
留学生は原則として自炊はできなかった。しかし、みんな内緒で湯沸かしポットや電熱コンロを使用していた。私も湯沸かしポットだけはこっそり使ったが、ある日、そのポットは突然ガスバーナーのような火を吹き、黒焦げになってしまった。火事にでもなったら大変、見つかったら大事だ。焼き焦げた赤井カーペットを擦り押さえつけながら、目立たぬように赤マジックを塗っておいた。

「自転車」

日本からは、夫と父から定期的に荷物が届く。時には友人からの差し入れもある。郵便局に荷物が届くと留学生課に連絡があって、その案内状をもって郵便局まで荷物を取りにいく。郵便局の窓口では、学生証を提示し、荷物1個につき1元6毛の手数料を支払った。郵便局までは歩くと15分あまりかかるが、仲良くなった服務員が自転車を貸してくれるときもあった。中国の自転車と言えば真っ黒で、やけにサドルが高い。決して足が

長くない私だが、少女時代に陸上選手として走り、飛んで鍛えたその自信ある運動神経で、地につかない足をカバーした。猛スピードで突っ走ると実に壮快だ。見渡してみれば、当の中国の人だって誰一人として足はついていなかった。

ある日、私は後部にマオをのせ日本の感覚で左側をスイスイ走っててい た。向こうから2人乗り自転車がやって来るのは気づいていたが、足が届かないうえにスピードもついているからそう簡単には止まれない。アーッと息を飲む間もなく正面衝突していた。幸いお互いにケガはなさそうだ。しかし、あいてはムッとした膨れっ面で、「謝れ!」と怒鳴りつっかかってきた。おっと、ここで素直に「対不起（すみません）。」と言うとこっちの負けが決まってしまう。冗談じゃない、これ以上罵られておまけに修理代を出せなどとなるとたまったもんじゃない、謝るもんか。私は、棒立ちのまま知らん顔をしてみせ、このまま何も言わずに黙っていれば、相手だってそのうち諦めるだろうと予測し、ときが来るのをじっと待った。しばらくたつと、集まったやじ馬の1人が、「日本人」と叫んだ。すると、相手はとたんに剣幕をやめ、目をつり上げたまま口をキュッッと結んで自転車をこぎだした。やがて、やじ馬たちも散りはじめ、私も再びマオを乗せ郵便局へ向かった。おそらく、



私が外国人だから許されたのだろう。これがお互い中国人なら罵街（路上の罵り合い）に至り、仲介者がいずれかに軍配をあげるまで、その罵り合いは続くのである。

「電熱コンロ」

日本から届く荷物は、栄養源はもちろん精神安定剤にもなった。ミオとマオは、父親からの荷物と少女漫画の月間号が1番の楽しみだった。しかし、この冬は彼が南米へ航海に出てしまい日本にいない。私の父からも、春節は郵便局も休むだろうから正月明けに送ると手紙だけだった。あてにしていたものが到着しないとなると、私たちの食糧事情は更に深刻さを増した。郷里の新聞社から「正月特集」の掲載料1万円が届いたが、お金があっても物がないのである。

留学生用の文明食堂も、学生の数が減るにつれ、品数も少なくなった。そのくせ値段だけは急激にアップした。いつもなら選べるメニューも、2、3品を大皿にもっただけで1人いくらとなった。半人前も食べない子供にも大人分を請求された。この時期はどの店も店員は休業して里帰りをするし、冬場は野菜も果物も大部分が姿を消したから値上がりはやむを得ない。事情はわかるが、満足に食べられない時ほどイライラすることはない。よし、決めた！電熱コンロを買おう。規則を破ることになるが自炊してみようと、一大決心をして街へ出た。

山西大学前から太原の中心街へは、トロリーバスで30分。二つの車両を蛇腹でつないだ、線路のない電気バスがこのトロリーバスである。トロリーバスの出入口は前後左右にあり、走行中は右側通行の中国では当然右側の入口から乗り降りす

る。ところが、終点の広場に着くとどのドアが開くかわからない。今日は右前かそれとも左後かと見当をつける。当たればすんなり降りられたが、はずれると最後の最後、車掌に「遅えなあ。」と嫌な顔でにらまれる。乗るときも同様、大変な思いをする。始発の広場では窓から乗る人もいた。

とにかく、いつ乗っても満員だ。もう乗せないで欲しいと思う以上の客を乗せている。人をよけようとひとたび足を上げると、次はもうその足を下ろす場所がない。だから体がそり返っても、吊り革をしっかりつかみ、何としても足だけはつかせておいた。

太原一のデパート、五一大桜で電熱コンロを買った。23元という出費は生活苦を伴うが、食糧難を越えるために奮発した。鍋はコガちゃんに借りた。食堂で大米（ごはん）だけを買ってきておかゆを作り、日本からの塩昆布を添えた。このコガちゃんの鍋は3元（日本円にすると百円にもならない）。後に私は、父が送ってきた米までも炊くようになる。たった3元の鍋でごはんから煮物、スープまでありとあらゆる料理を作るが、それを見たコガちゃんは「日本の奥様は、一つウン万円の鍋でお料理してるってのに東海は3元の鍋でオルマイティー、そうだわ！“東海の鍋”を売り出しましょうよ。」と、冗談を言った。さて、電熱コンロを購入したのはいいが、日本からの段ボールもすっかり空になり、ついに最悪の日を迎えた。

「北京へ」

夕方、いつものようにアルミの弁当箱をさげ食堂へ大米を買いにいった。ところが、「今日は何もないよ、作ってないんだからね。」という返事に驚いた。何もない　本当にない！青ざめて急いで部屋へ戻ると、段ボール箱のふたを開け底をかきまわした。確かにあったはずのインスタントラーメンも、スープの素も、キャンディーも、缶詰も何ひとつつかみ出せない。日本から届いたこの箱も、とうとう食べ物を出す魔法を切らしたのか。仰向けに引っ繰り返り天井から床までぐるりと見回したが、あるのは服務員が入れていったポットのお湯だけ……、それももうぬるい。今夜は早めに寝るとしよう。そう決めるとコップに注いだ湯を一杯ずつ飲んで、おしゃべりせずベッドに入った。やがて、ミオとマオの寝息が響いた。

「やっぱり北京へ行こう。何かおいしいものを食べて元気をつけよう。」早速、旅行社へ切符を取りにいったが、何時間も待たされたあげく1日目は予約だけ、2日目にやっと切符を手にしたときは発車時刻が迫っていた。あわてて北京行きに飛び乗ると全身の力が抜けた。

北京は3度目である。いつもハー徳門飯店に泊まるが、それまで1泊80元だった宿泊料が、一気に2倍の160元にはね上がっていた。せめてもの救いは、先月ほどではないが為替レートがまあまあいい線であることだ。交換レートが気になる生活も、汽車の運賃やホテル代が中国人と異なる「外国人料金」と呼ばれる割高出費も、自らが触れてみて始めて知ることばかりだった。

冬休みの5日間を、私たちは北京で過ごしたが、ホテル住まいをし和食を食べていると、ここなら日本の生活そのままだと感じた。しかし、「中国」という外国へ来て日本の生活と同じレベルで過ごしていたのでは、面白くも何ともない。語学学習だけなら日本にいていくらでもできる。日本へ帰ってから語れる思い出ができるのは、きっと太原の方だ。私は太原が好きだ。

パレスチナ選挙監視報告

森田　充浩
（第21回青年の船参加青年
日本青年国際交流機構幹事（企画担当））

1996年1月20日、世界の歴史において重要な選挙が行われた。イスラエルとPLO（パレスチナ解放機構）との間で結ばれたパレスチナ自治拡大協定に基づくパレスチナ自治選挙である。

私はこの地へ外務省の派遣により選挙監視員として参加した。選挙監視は、1993年のカンボジア選挙についで二度目だが、前回の投票所の責任者（Internatioanl Polling Station Officer）としての立場ではなく、純粋な意味での選挙監視員（International Observer）であったので仕事は比較的つらいものではなかった。

今回の選挙では、パレスチナ評議会議員88名と評議会議長1名を選ぶものであるが、評議会議員の選出は中選挙区制で立候補者の中から複数人投票できるので初めての選挙にしては複雑だったように思う。

日本人の監視員は、国会議員19名を含め70名以上が参加し、ヨルダン川西岸地区とガザ地区へふりわけられた。私はエジプト国境にいちばん近いRAFAH（ラファ）という地区を担当した。

選挙監視業務は投票日までの間不正がないか見守ることと、投票所の確認、選挙当日は数カ所の投票所を巡回して見回り、夜間から始まる開票作業をチェックすることである。投票所はUNRWA（国連パレスチナ難民救済事業）によって設立された学校や役所が割り当てられており、選挙管理をする地元の人も教師などの教育水準が高い人が多かったので、危険な目にあうことはなかった。

投票日当日

投票日当日は朝からきれいに着飾った女性や子供に手を引かれた老人など多くの人々がつめかけ、投票所となる学校の入り口が狭いのも手伝って、多少の混乱はあったが、投票時間を延長するなどによって無事終了する事ができた。

投票率も80%を越え、アラファト議長とファタハ系の議員が多く当選した。一部にはアラファト体制の正当化にすぎないとか、難民として流出したパレスチナ人に投票権がないのは不正だとか言う人もいるが、この選挙はパレスチナを国際社会の中に組み込む第一歩であるので、最初から完全な民主的選挙は不可能である。これを足がかりに三年後に完全な自治を目指すので、足場ができただけの段階を批判するよりも、これから先どのような国をつくるのかが重要な課題である。

日本は、すでにパレスチナに2億ドルもの援助をしている。この援助がパレスチナ人の自立を助ける援助となっているのかどうか、我々日本人はその使い道を監視していかなくてはならない。

ガザ地区は電気、水道などインフラが不完全でイスラエルからの供給に頼っている。これらの整備は日本の得意とする分野なので経済活動が行える場を日本が提供することを望みたい。

やる気があれば、道は開ける！
「ブラジルに絵本を送る活動」

とっとり青友会会長　長谷川浩司

『とにかく何とかしなければ……』とぐるぐる頭は回っていた。考えてみれば、今まで、県にベロベロと甘え自助努力を「知らんけん」と怠っていたからなのだが……。

県の派遣事情の打ち切りは涙虚しく決定され、総務庁派遣者は相変わらず少人数とは、いかにも弱小県にはひどい仕打ちではないか。それでも、新たにJICAの受入れ事業や留学生との楽しい交流事業（料理教室、スキー、中国語講座など）大幅に見直し、他県との交流も活発にしていったのだが今一つ意識を変えるまでにはいかなかった。

風

ところが、新しい風はいつ、何処から吹くか判らない。それは、偶然ではなくみんながなんとかしなければとアンテナを張りめぐらして行動していた成果でもあるのだが。

1枚のFAXが「風」を吹かせたのである。ブラジル、アリアンサの日本語学校に赴任した青友会のメンバーが「教材が少ないので小さな頃から親しめる絵本を送って下さい」という連絡を入れてきた。これが風を呼び雲に乗りワワッと言う間に全国に広がっていった。

最初、300冊位集まればよいかな？と軽い気持ちで始めたものの、地元（鳥取）ではうーんと唸るほどしか集まらなくて「これではあかんな」と嘆いていたのだが、全国紙の教育欄などに取り上げられてしまってから事態は大きくと変わり始めた。毎日、15箱を超える段ボール箱がはるばる届き、絵本に埋もれる毎日になんだなんだ状態になってしまった。そのうえ、手紙や葉書も怒濤のごとく押し寄せてくるではないか。それらの対応にてんやわんやしているうちになんと6,000冊!!!を突破。「これはもう根性据えてやらなイケン」という感じになってしまった。

なんか自信ないと思っていてメンバーに驚くほどの自信がわき起こり、目が輝いてくるではないか。「これは国際支援ボランティアだ」と言う意識がムクッと起き出し、『楽しく、役立ち、賢い、大満足』という標語を掲げられる展開になっていったのだ。全国の出版社、各市民団体、素敵な一人暮しのご婦人などに、ネットワークは広がったのである。

未　来

現在、他の団体と手に手を取り合いベトナム、モンゴル、中国、アメリカなどの国々にも絵本が必要とあらば送るぞー!!と呼びかけています。（送りますので要りませんか？が本当なのだが）この事業は1年こっきりで終わるのではなく出来たネットワークを大いに活用してずっと続け、3年後には絵本を各地へ持っていきながら交流を深めようと夢を語り合いながら、今日もぐびぐびビールを飲むのであった。

上を向いて歩こう～SSEAYP FOREVER～

田中南欧子（「第22回東南アジア青年の船」ＮＬ
「第７回東南アジア青年の船」参加青年
岡山 YMCA 講師）

昨年の大晦日、私は瀬戸内海の余島で YMCA のファミリー・キャンプにで参加していた。

ホールで紅白歌合戦を見ていると、「上をむいて歩こう～」の歌声。プログラム中、新潟出身のＤ君による名振付と共に SSEAYP '95 で大ヒットし、寄港地毎のレセプションなどで何度も歌ったあの歌。思わず口ずさみ、いつの間にか私の手足は動いていた。そして、参加青年一人一人の顔が次々と目に浮かび、にっぽん丸での夢のような日々を思い出した。

42名のマミーとなって

1995年は、日本中を揺るがす大地震や大事件で始まった。私自身、前年に兄を亡くし、まだ落ち込んでいた。そんな時、再び「にっぽん丸」に乗れる機会をいただいた。しかも、恐れ多くもナショナル・リーダーとして。この私に務まるだろうか？子供は？体力は？様々な不安があった。しかし、夫と母の強い励ましと協力を得ることができ、子供たちの見送る晴海から、９月28日出発した。そして15年前にはなかったレインボー・ブリッジをくぐった時、私は42人の大きな子供をもつ「マミー」になっていた。新しいにっぽん丸は、２倍も大きくナイト・パトロールも時間がかかったが、素晴らしく贅沢な住まいだった。余りに現実との落差が大きすぎて、家に帰った後もしばらくは、台所に立つと頭痛がしたものだ。

「PYとして参加するのとNLとでは、どちらがいいですか？」これは、プログラム中最もよくきかれた質問だ。８人のナショナル・リーダーの中で以前参加した経験を持つ、ブルネイとタイのNLも同様だ。「若い頃はPYが良かったけど、この年齢ではやっぱりNLかしら。」なんて、あいまいな答え。実際、COCなどでは、四苦八苦だったが、時にはNLの枠を飛び出して楽しませていただいた。「にっぽん丸～」なんて歌っていると、つい我を忘れてPYしている自分に気付く。

15年ぶりの再会

そして、各寄港地でうれしい旧友との再開が私を待っていた。私にとっては初めてのブルネイでさえ、結婚してシンガポールから移住したＨと15年振りに会えた。彼女は、ホームステイを引き受けていて、３人のお子さんとその会場に現れた。コタ・キナバルでは、昔同じグループだったＤ氏が受入委員会で活躍していた。しばらく離れ

ていたアルムナイ（同窓会）の活動に最近また戻ってきたところだと言う。港で彼を見つけた時には驚いた。昔よりスリムになっている！シンガポールでも、バンコクでも15年を経て再会した友人の多くはその反対になっていたのだから。もちろん私自身も例外ではないが。

SSEAYPの価値を改めて知る

一度この事業に参加した人は、国を越えて、年齢を越えて、すぐに友達になれる。マニラで出会った第1回の参加者アミーナ女史のスピーチは、今も心に残る。昼食会の席上、前日暗殺されたイスラエルのラビン首相のために黙祷を捧げた後、彼女はSSEAYP FAMILYの一員である私たちの使命について、熱っぽく語った。22年間続いたこの船は、各国で多くの人材を育て、ASEANと日本を結ぶネットワークを形成してきた。そして、

▲ Japan National Day　和服の各国NL

これからも途切れることなく続けていかなければいけないと。特に、戦後50年の昨年、ASEANに加盟したベトナムのオブザーバー参加は、15年前には予想だにしなかったことである。

11月20日、東京で解散式の後、パーティーで最後にみんなで歌った「上をむいて〜」。いつも助け合ってきた、もう一人の女性ＮＬ、フィリピンのマミーも一緒に。彼女は「今度乗れたらPYがいいわ」と片目をつぶり悪戯っぽく言った。

"It's a small world!"

岩倉　多江（和歌山県）
（「第22回東南アジア青年の船」参加青年）

「第22回東南アジア青年の船」を終え何か月かたった今、時々ふっと、ASEANの国々の様子や出会った人達のことを思い浮かべることがあります。それはそれは数えきれないほど多くの貴重な体験をし、沢山の人々との出会いがありました。「世界って広いようで狭いんだなあ」と思った体験もありました。最初の訪問国ブルネイで、この訪問の1年前に我が家に滞在したブルネイ女性、シャリパーと再会できたことは、その一つです。私のホスト・ファーザーは、彼女と同じ「21世紀友情計画」で日本に来たことがあり、彼女を知っていたのです。お陰でシャリパーと再会できるとは二重の驚きでした。ブルネイを離れる時、シャリパーは、色鮮やかなバジュクロン（民族衣装）を着て見送ってくれました。遠ざかる彼女の姿が霞んで、周りの木々の緑に溶け込んだ時、ボワーンと一面に水彩画の世界が広がっていました。

"It's a small world!" たくさんの驚きを経てASEAN諸国が、世界の国々が、今までよりもっともっと近くに感じられるようになりました。

まだ、終わっていない東ア船

長谷川真紀
（「第22回東南アジア青年の船」参加青年）

筆者右側 ▶

初めての東南アジア、初めての長期の船旅、そして初めて会う人達。「東南アジア青年の船」（以下、東ア船）の参加者（以下、PY）に決まったものの、とにかく「初めて」だらけだった私にとって、いざ準備を始めると、正直言って期待よりも不安の方が大きくなってしまうこともありました。晴海埠頭で「にっぽん丸」に乗り込んだのが、9月28日。その1週間後には、ブルネイに到着し、アセアンPYも乗船し、いつの間にか私の不安もどこかに消えてしまったのでした。

百聞は一見に如かず

プログラム参加中には、幾つもの新しい体験をしました。特に、それまであまり接することのなかったイスラム文化に触れ、色々と考えさせられました。例えば、日本で生活していると、トイレにトイレットペーパーではなく、水瓶がドンと置いてあるのを見たときにはさすがに戸惑いました。でも、そこに住む人にとっては、それ当たり前なんですよね。また、ブルネイでのホームステイでは、箸やフォークを使わずに手で食事をしたのですが、これが以外とおいしいのです。このプログラムの良いところの一つは、各国でホームステイが出来ることだと思います。「現地の人と実際に生活してみて初めてわかることが、沢山あるんだな。」と感じました。最近は、日本にいても東南アジアの情報が比較的簡単に手にはいります。でも、それはあくまでも他人の目を通して見る東南アジアです。「百聞は一見に如かず」というのを肌で感じた2か月間でした。

船の中では様々な活動が行われました。一番印象に残っているのは、各国紹介です。各国のPY達が自国の文化、社会を紹介するため、展示とパフォーマンスを用意したのですが、どの国も趣向が凝らしてあって、見にいくのが楽しみでした。展示では、その国の社会、風俗などを色々な方法で見せてくれるので、面白いし、勉強にもなりました。やはり、初めて目にするものが多かったのですが、そうかと思えば、日本のものと全く同じ様な紙風船やコマがあったりして、びっくりしたりもしました。

終わりの始まり

この他にも数え切れないほどたくさんの活動があり、たくさんの思い出もできました。手紙の返事を書くのが大変なぐらい友達も出来ました。

でも、船から降りてずいぶん経った今でも、東ア船から私が得たものは、まだはっきりとはわかりません。下船後、東ア船が私に与えた影響について改めて考えてみた時、「あっ、これはきっかけなんだ。」と思いました。つまり完結していないのです。プログラム自体は終わったけれど、私の東ア船はまだ続いているのです。そして、10年、20年経って、やっとその影響が見えてくるのだと思います。今は、せっかく得た貴重な体験を生かせるよう、精一杯がんばりたいと思っています。

友達を「財産」にしちゃおう！

井上久美子 〔1994年「第21回東南アジア青年の船」参加青年　兵庫県西宮市在住　電子メール（NIFTY）: NBB03366　インターネット: nbb03366@niftyserve.or.jp〕

公務員、ダンサー、校長先生。もしこれだけの友達が一冊の住所録に収まっていたとしたら、相当広いネットワークの持ち主だろう。単なる名刺交換でさえ、同じような職業・年齢に偏りがちである。少なくとも、私はそんな凡人の一人。

「東南アジア青年の船」に参加してから約1年少々。3度のホームステイで我が家に来てくださった面々を紹介してみると、以下のようになる。

「Ms. Elizabeth Lee Halvorson, アメリカ／職業：公務員」「Ms. Shariah Ahamad, Ms. Nur Razidah Aziz, マレーシア／職業：マレーシア国立舞踊団所属のダンサー」「Mr. Anthony Gribbin, オーストラリア／職業：クィーンズランド州文部省　校長」

わたしは家族が少ないので（夫と二人暮らし）、毎回、夕食には友人を呼んでいる。もともと交友関係が広いほうではない上に、2年半前に夫の転勤で関西に来たので、気軽に誘える友人は数えるほどだ。どうにも、自分の「受け皿」が狭いのである。楽しいホームステイだと自負していても、相手にとってどうだったかと問うてみると、何とも心もとない。もっと有意義な時間を演出できないのだろうか……と考えてみた。

そこでわたしがたった今、思い付いたのが「ホームステイ協力メンバー・バンク」だ（笑）。この文章を書きながら「パソコン通信 NIFTY-Serve のなかにホームパーティー（HP）を開設したい」という小さな野望を抱いてしまった（笑）。

こんな具合である。普段からお互いの事後活動、得意分野などを情報交換しておく。そして、ホームステイ受入れの際には、わたしが依頼主と連絡をとったり、美味しい（と思う）料理や我が家を提供する。その代わり「楽しい会話」を提供してくれるメンバーを募るのである。もちろん、私のおしゃべりも、はっきり言って面白い（笑）。

いろいろ想像してみよう。たとえば、「来月、ダンサーを受け入れます。」とわたしがパソコン通信で予告しておく。芸能・芸術分野に興味のある人、または実際に活躍している人に、我が家のホームパーティーに加わってもらう。センスとセンスがぶつかり合うかもしれない。また「日本文学を専攻している留学生がやってきます」と予告したとする。自称・文学青年が集まってくれれば、味わい深い会話が生まれるかもしれない。

ささやかなことでよいから自分の得意分野をもつこと、そしてそれを惜しみなく提供すること。どんな種類のネットワークも、お互いが楽しく心豊かになるには、結局のところ、これしかないと思う。友人・知人は眠らさせておかないで、お互いの「財産」にしてしまうことである。

もしも関西地区にお住まいで「ホームステイ協力メンバー・バンク」に興味を持たれた方がいたらメールをください。お待ちしています。

「しあわせって　なに」～総務庁青少年国際交流事業報告会～

▲ デンマークについて発表した奥平さん

▼ グループ懇談会

1996年1月27日、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターにて平成7年度の国際青年育成交流、日・中青年親善交流及び日・韓青年親善交流の各事業参加青年により事業報告会が行われました。全国より50名に及ぶ平成7年度参加者が再集合し、4か月ぶりの再会に楽しい一時を持つことができたようでした。

内容は、「しあわせって　なに」と題し、様々な事業体験の中から得た感動や疑問、発見した事柄をぶつけあいながらの寸劇やグループ懇談会、そして自由に見学したり質問ができるようにオープンスペースのスタイルにした展示会等、実行委員の工夫を凝らした報告会となりました。

只、「しあわせって　なに」との題材でグループ討論を展開することは、抽象的になってしまうグループもあり、少々苦労した部分もありました。

◀ 参加者にインタヴューする加藤君

ブラジル班の展示会場 ▶

第23回全国推進会議

（日時：1996年3月2日㈯・3日㈰　　会場：国立オリンピック記念青少年総合センター）

㈶青少年国際交流推進センターの設立から2年を経過し、日本青年国際交流機構と財団の二人三脚も定着してきたことを感じさせる雰囲気の会議でした。また、代表者の顔ぶれが少しずつ若返り、世代交代ができる組織に育ちつつあることを示していました。

本会議の重要議題の一つは、日本青年国際交流機構本部役員の改選でしたが、大森充会長以下、各ブロック幹事を含めて25名が選任され今後2年間の体制が決まりました。

今回の特徴は、2年後の改選を睨んで本部幹事の事務局次長以下のメンバーに若い世代が増えたことです。IYEOは、幅広い年代から活動家を得られることが組織の特徴ですが、運営の中心を若い世代のリーダーシップによって行うことによって、さらなる発展を目指したく思います。

平成8年度日本青年国際交流機構役員名簿

役職		氏名
会長		大森　充
副会長		酒井洋幸
副会長		三浦博史
副会長		早川理恵子
副会長		森田正英
副会長		鈴木光雄
幹事	事務局長	大橋玲子
	事務局次長	椿　景子
	事務局次長	山本克己
	組織担当	篠崎浩子
	組織担当	友岡俊博
	企画担当	森田充浩
	国際担当	鈴木芳信
	国際担当	赤澤美雪
	広報担当	桶谷正一

監査役		大谷直義
監査役		岡坂久隆
ブロック幹事	北海道東北	佐藤周一
	関東	和久和夫
	北信越	田中克己
	中部	醍醐良子
	近畿	焼野嘉津人
	中国	小塚昭郎
	四国	田村邦美
	九州	金城常雄

顧問	寺下英明
顧問	奥野照義
顧問	坂田清一
参与	殿村立雄
参与	柊　巌

総務庁青少年対策本部国際交流振興係

昨年のマクロコズム第4号で、総務庁青少年対策本部の国際交流事業の事後活動担当である国際交流振興係についてお伝えしましたが、この4月に大移動がありメンバーが代わりました。全国大会、ブロック大会等で顔を合わせたり、何かとお世話になるメンバーですので、全国の皆さんも是非覚えて下さいね。

林国際交流担当参事官：　国際交流班の責任者。第21回・22回東南アジア青年の船管理官として乗船。国際交流大好きで、この担当は天職かとは、ご本人の弁。OECD代表部勤務で鍛えられた英語力を駆使して、今日も明るくインターネット。

笹島国際交流担当調査官：　第8回世界青年の船管理官として「にっぽん丸」での2か月を体験し、この3月に下船したばかりのナイスガイ?!。乗りの良さは天下一品。昨年7月、着任2週間後IYEO若手研修合宿に参加したのは有名な話し。

井上国際交流振興担当補佐：　淡々とした仕事ぶりの中に優しさが滲み出る、一見ほんわかタイプ。でも、時々眼鏡の奥がキラリと光り、厳しさも。

竹中国際交流振興係長：　公務員生活4年目に、最も公務員らしくない部署に来て3日間は戸惑っていましたが、さすが若さ。今や、厳しい指示出しで振興係の要。

幕田国際交流振興係員：　第23回東南アジア青年の船管理部員として今秋乗船予定。只今、秋に向けて現場修行中。結構はまってしまうかも。

韮沢国際交流振興係員：　第8回世界青年の船管理部員として乗船。厳しい管理部の仕事も明るくやり遂げ、振興係でもさりげない仕事ぶり。

清水国際交流振興係員：　第22回東南アジア青年の船管理部員として昨年乗船。ゆったりとした雰囲気で受け応えしてくれます。

奥国際交流振興係員：　第22回東南アジア青年の船管理部員として昨年乗船。今回のSIGAにも参加し、只今、事後活動邁進中。

総務庁青少年対策本部
〒100　東京都千代田区霞ヶ関3－1－1
合同庁舎第4号館
TEL　03－3580－5365
FAX　03－3506－1949

お知らせ

第8回青少年国際理解セミナー

「第8回世界青年の船」帰国報告会

平成7年度の「第8回世界青年の船」参加青年による帰国報告会が、下記の日程で行われます。総務庁青少年国際交流事業について知りたいと思っている友人知人の方々に、ぜひ知らせてあげて下さい。「世界青年の船」以外の事業についても説明するコーナーを設けますので、来年の応募希望者の方には貴重な情報収集のチャンスです。

日　　時：1996年6月30日（日）　12：30〜16：30
会　　場：国立オリンピック記念青少年総合センター　国際交流館第1ミーティングルーム
参加費：無　料
主な内容：スリランカ・南アフリカ・タンザニア・アラブ首長国連邦における寄港地活動や船内での活動を撮影した写真や団員が持ち帰った品々の展示、ビデオ上映、事業体験談発表、グループ別懇談等のプログラムに、お茶やお菓子を楽しみながら参加していただきます。
申込み：㈶青少年国際交流推進センターの「セミナー係」まで電話、FAX又は葉書にてお申込み下さい。宛先は、下欄の㈶青少年国際交流推進センター事務局へ。

平成8年度ブロック大会のお知らせ

近畿ブロック大会（滋賀県）
日　　程：1996年7月6日（土）〜7日（日）
会　　場：滋賀県青年会館　〒520 大津市唐橋町23−3
会　　費：10,000円（1泊2食）

編集後記

第10号が発行されて少々感激しています。当初、「2か月に一回の発行なんて続くのだろうか。」などと気の弱いことを、心密かに思っていたものでしたが、10号を迎えてみると会員からの投稿も増えてもっとページ数が欲しいような気持ちにもなります。皆様、今後ともよろしく！

＊本誌の年間講読をご希望の方は、㈶青少年国際交流推進センターまで葉書又はＦＡＸにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM（マクロコズム）　5月号　Vol.10　1996年5月1日発行（隔月発行）
編　集：マクロコズム編集委員会
発　行：財団法人　青少年国際交流推進センター
〒103 東京都中央区日本橋人形町2−35−14
TEL　03−3249−0767
FAX　03−3639−2436
e-mail LDP04056 @niftyserve.or.jp
編集協力：総務庁青少年対策本部
日本青年国際交流機構
定　　価：195円（本体189円）
印刷所：株式会社　絢文社
TEL　03−3959−3960

「第22回東南アジア青年の船」報告会

㈶青少年国際交流推進センター及びIYEOの主催により3月17日（日）の午後12時30分から、国立オリンピック記念青少年総合センターにて「第22回東南アジア青年の船」報告会を第6回青少年国際理解セミナーとして開催しました。

総務庁青少年国際交流事業の募集時期でもありましたので、募集説明会も兼ねた形で150名に及ぶ参加者を得て行うことができました。

第22回の参加青年は、全国から28名（42名中）が大集合し精一杯の頑張りを見せてくれました。

▲ 第22回事業の全体概要を説明する曽根アシスタント・ユースリーダー

◀ 興味のある国別に分かれて懇談会形式で分科会を進める ▼

◀ 最後の全体懇談会は、バンブー・ダンスに挑戦したり、アセアンの歌を一緒に歌ったりの体験型に組み立てました

▶ 頑張りました！実行委員の面々

都道府県 IYEO の国内活動

〔事業報告会は、事後活動の原点〕

▲ 北海道 「船と翼のつどい」

10月の北海道・東北ブロック大会の開催に続いて、12月には平成7年度事業の参加青年による報告会を中心として、マダガスカルからの留学生に話しを伺うプログラムも含めました。

▲ 兵庫県

震災から1年。新しいメンバーを迎えて頑張っています。

〈今年度は、毎号各都道府県 IYEO の活動紹介をカラーページに掲載します。〉

▼ 奈良県

「国際交流大和路ふれあい（ユースアミティ・イン・ナラ）」

奈良県の在日外国青年を招いて、祭り体験、ウォークラリー、シンポジウムの内容で開催

▼ 京都府

「国際交流スポーツ＆バーベキュー大会」

韓国・中国・トルコ・フィリピンの在日留学生を迎えて、楽しい一日を過ごしました。